

特別支援学校における教科教育学的研究

—— 学部間の連携による教育課程づくり ——

渡邊 貴裕*・丸井 曜子*・原田 純二*・小島 啓治*
尾高 邦夫*・國分 充**

東京学芸大学附属特別支援学校

(2007年9月28日受理)

キーワード：特別支援学校・教育課程・体育

I. はじめに

障害のある児童生徒の教育支援、発達支援などの在り方に関して、ここ数年の動向は著しく大きな変化がみられる。特に学校教育の分野における障害児童生徒の支援は、「特別支援教育」の推進の中でそのシステムの整備が確実になされているといえる。平成19年4月から、「特別支援教育」が学校教育法に位置づけられ、すべての学校において、「障害のある児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援するという始点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行う」(中教審、2005)¹⁾ ことになった。

こうした社会的動向を踏まえ、実際の学校の教育活動を運営していくためには「教育課程」に基づいて指導を行っていかねばならない。「教育課程」とは、学校教育の目標を達成するために必要な教育内容を選択し、組織し、時間数との関連において配列した教育計画である。そうした「教育課程」にそって一人一人の指導計画をたて支援していくのが「特別支援教育」の特徴でもある。また、「特別支援教育」は、乳幼児期から学校卒業に至る長期的な視点で一貫した支援を実施するという理念の下すすめられる。よって「教育課程」の編成においても卒業後の生活を見据えた教育内容が十分に準備されるべきであろう。

障害のある人が学校を卒業後、それぞれの地域におい

て健康で豊かな生活を営むためには、仕事以外の時間である「余暇」をいかに充実させることができるかが大きな意味をもつといえる。そしてなにより心身ともに健康な生活をおくるためには、日常的に体を動かす機会や、仲間と触れ合う機会をもつことが大切でありその点においても運動やスポーツが果たす役割を大きい。しかしながら、障害のある人の余暇に目を向けたとき、運動やスポーツに日常的に関わっている人はごくわずかであることも事実である。

この点からみると、現在の「特別支援教育」が求めるものと、現状とでは大きな差異があるといわざるをえない。こうした現状をよりよいものに変えていくためには、先に述べた「教育課程」の編成や教育内容、とりわけ体育の教科教育の充実はより卒業後の生活に精通した内容であるという理由でも重要な役割を果たすものであるといえる。

先に、障害がある人の運動の実施状況やスポーツ参加の状況について触れたが、では実際に障害がある人は日頃どんなスポーツ活動に取り組んでいるのだろうか。知的障害作業所の利用者の余暇活動をみたところ、スポーツに関係するものの中では、ボーリングやフライングディスク、ソフトボールといった「球技」に関係する項目が半数を占めている。また、障害者スポーツ団体の6割以上は球技種目の団体であり、全国障害者スポーツ大会の10種目中、8種目が球技種目である。(発達障害白書、2005)²⁾ こうした現状にもあるように、特別支援学校の体育を考えていく際、球技のもつ集団性や競技性といっ

* 東京学芸大学附属特別支援学校 (203-0004 東久留米市氷川台1-6-1)

** 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

た特性を楽しめるようになることは、生涯スポーツを目指すという意味でも重要であるといえる。

Ⅱ. 目的

本研究では、学部間の連携と協同に基づく球技指導について実践を通して検討し、体育の教育課程をつくるための一資料を得ることを目的とした。

Ⅲ. 方法

1. 対象

東京学芸大学附属特別支援学校、幼稚部から高等部までの幼児・児童・生徒70名を対象にした。

2. 研究方法

4つの学部の体育担当教員により、体育の授業とりわけ球技指導についての課題を整理し、各発達段階に考慮しながら学部間の指導のねらい等について協議し、そのうえで「球技指導の段階性 (図. 1)」（渡邊他, 2007)³⁾を設定した。それをもとに各学部にて平成19年1月をめぐりに研究授業を行った。

3. 指導内容

各学部の指導段階とねらい、方法については以下の通りである。幼稚部では、「投げる・捕る」動作を身につけるための準備段階として「転がる」「はずむ」といったボールの特性に十分親しめるような遊びを通して、ボールへの関心を高めていく。小学部では、「投げる・捕る」動作を習得していく段階として、幼稚部段階と同様にボールに親しみながらも実際にボールを投げる、捕る指導を行っていく。中学部では、小学部までに身につけてきた「投げる・捕る」動作を数種の種目を通してさ

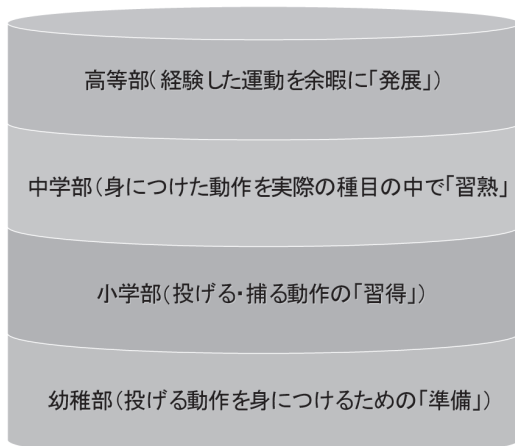


図1. 球技指導の段階性

らに高める。あわせて球技種目の楽しさを味わい、ゲームのルールや球技の特性を活かし集団性を高めていく。高等部では、中学部までに経験してきた運動技能や運動種目の経験を活かし、卒業後や余暇を見据え、さらに活動の広がりを持たせるため多種に渡った種目を体験する。

Ⅳ. 実践研究

1. 幼稚部の実践

「投げる動作を身につけるための準備」をねらいとした授業づくり

1-1. 目的

ボール遊びを通して身体を動かすことを楽しむことや、将来ボール運動に必要な力の基礎を築くために、「転がる、はずむ」といったボールの特性に親しむ教材を使って遊ぶことや、大きさ、重さ、素材の違う色々なボールに戯れる経験をするための2点を指導のねらいにした。

1-2. 方法

週1回行われる「運動遊び」の時間に、幼稚部遊技室内に巧技台でエリア(10m×5m)を作り、その中にカラーボール(直径7.5cm)をちりばめ、幼児の手の届く場所に常にボールがあるような場面を設定しボール遊びを約一ヶ月間行った。また、ボールを転がす、つかむ、落とす、ほうる等、ボールの特性や経験させたい動きにあわせた教材(写真2)を作成した。それらをエリア内に次々と出していき、教員は幼児を教材に注目させる、遊び方のお手本を見せるといった支援を行った。

また、「自由遊び」の時間に遊技室内でボール遊びを行った。大きさや、柔らかさ、重さ、素材、色等、それぞれ違う種類のボール(15種類)を準備し、その日のボール遊びのメニュー(例えば、「今日は○○○のボールを使って△△△をしてみよう」)を決め、一人ずつ遊びに誘い必ず全員の子どもがメニューを経験できるようにした。メニュー例については以下の通りである。

- ・11月〇日「ソフトバレーボールを床に落として片手についてみよう。」
- ・11月〇日「落ちてくる紙風船を両手でキャッチしてみよう。」
- ・12月〇日「バランスボールの上にお腹で乗ってみよう、座ってみよう」
- ・12月〇日「天井からゴムでつるしてあるスポンジボールを手でたたいてみよう」等。

これらのメニュー内容は、単にボールを投げるだけでなく、「ボールに親しむ、戯れる」という点を意識し、「ボールの上に座る」「足で蹴る」「大きなボールを両手で抱え

る」等, 身体全体でボールに関われるようなものも組み込んだ。ボール遊びの期間は遊戯室の遊具を厳選し, 幼児がボール遊びに没頭できるよう環境設定した。(写真1を参照)

以上の実践をもとに, 幼児のボールへの関心や, ボールの扱い方の広がりについての観察記録をもとに検討した。

1-3. 結果及び考察

カラーボールを使った実践では, 単にボールがエリア内に散らばっているだけの環境下では, ボール遊びへの関心や意欲が限られたものであったが, そこにレーンやペットボトルラケット, カラーボールを入れ込む箱等の教材が加わることで, 自らボールを拾い集めてボール遊びに興じる幼児の姿が見られるようになった。一つの遊びに集中力を持続させることが難しいという幼児の特徴を踏まえ, 今回の実践ではエリア内に一度に教材を並べるのではなく, これらを時間差で出していくようにした。このことで6名の幼児全員が約25分間, ボール遊びに没頭することができた。

自由遊びの時間を利用したボール遊びの実践では, 色々な種類のボールを用意したことで, 転がり方やはずみ方の違いを経験することや, 色々なボールの扱い方を体験することができた。また, カラーボールを使った実践と同様に, ボール遊びを高める教材が子どもの遊びの意欲を高める上で有効であった。

一ヶ月の実践で, あまりボールに関心のなかった幼児が, 自分からボールで遊ぶ姿が見られるようになった。また, それまでボール遊びといってもせいぜい放り投げるくらいだった幼児が, ボールを足で蹴る, 滑り台から転がす, 連続して手でついてみる等, ボールの扱い方, 遊び方にも広がりがでてきた。「家でもボールで遊ぶようになった」という連絡帳の記録からも, 幼児のボールへの興味, 関心の高まりをうかがうことができた。今回の実践では教員が幼児の遊び相手として関わる以外に



写真1 「自由遊び」におけるボール遊びの例

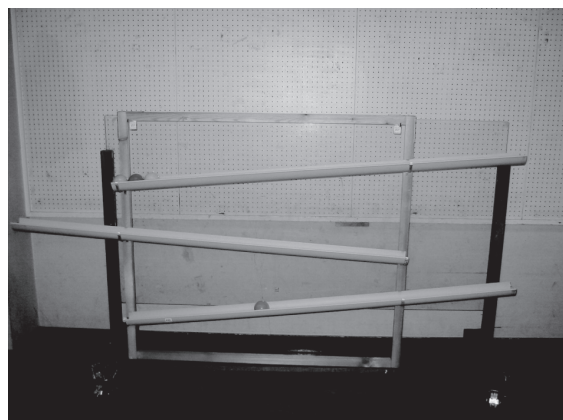


写真2 ボールの特性(転がる)に親しむ教材の例

も, 教材を利用しながらボール遊びを行ってきた。今後はボールに親しむ, 戯れる経験をさらに増やしていく一方で, 小学部段階でのボール運動のねらいである「投げる・捕る動作の習得」につなげていけるような, ボール遊びの方法や教材づくりについても検討していきたい。

2. 小学部の実践

「投げる・捕る動作の習得」をねらいとした授業づくり

2-1. 目的

ボールを「投げる・捕る」動作を身につけていくことをねらいとした。そのために, 実際にボールを投げる(オーバーハンドスロー), 捕る(胸受け)の指導を行った。また, ボールを投げる動作に類似する活動を通して, 投げる動きを作ることにした。

2-2. 方法

週3回行われる「体育」の時間に, 小学部プレイルーム内でボールを使った実践を行った。

この単元は以下の4点に留意し取り組んだ。

- (1) 準備運動にもボールを使い, ボールの特性(転がる・はずむ)をつかませる。児童一人がそれぞれ一つずつボールを使い, 教員が師範する課題(ストレッチやバランス保持する運動)を模倣しながら準備運動を行う。
- (2) 色々な種類のボール(お手玉等を含む)を, 教員や目標物に向かって「投げる」経験を重ねる。ゲーム感覚で目標物(的や籠)に向かって数多くボールを投げ込む。また, 教員から(投げ)渡されるボールを「捕る」経験を重ねる。
- (3) 適切な「投げる・捕る」フォームの習得をするために, 「投げる・捕る」動作のポイントを整理し, 技術的な指導を加えていく。「投げる」動作の指導のポイントとしては, 片手投げを徹底して, 次の5点に焦点をあてて指導した。投球前の構えとして, ①顔の向き・視線②身体の向き③バックスイング投球動作として, ④フォロース

ルー⑤体重移動。また、「捕る」動作の指導のポイントとしては、胸受けを徹底して、次の3点に焦点をあてて指導した。①投げ手や投げ手から転がるボールを見ること②捕球前の構え③ボールを身体の正面からとらえること。

(4) ボール投げに類似する活動を通して、投げる動きを作る。500mlのペットボトルの蓋の部分と底の部分に穴をあけ、ひもを通して「ペットボトル・ロケット」を作成した。的「お月様」にひもの先端を結びつけそれを後方に伸ばし、的にめがけてロケットを飛ばすという遊びである。より遠くに的を設定することで、上手投げのバックスイング、フォロースルー、それに伴う体重移動といった動きを引き出すことをねらいとした。(写真4を参照)

以上の実践をもとに、事前・事後テスト(ソフトボール投げ)の結果や、ボールを投げる・捕るフォームについてビデオ記録をもとに検討した。

2-3. 結果及び考察

実践前と後にソフトボール投げのテストを実施したところ、6名の児童のうち3名の児童に飛距離の伸びがみられた。この結果だけをみると指導効果があったとは言いがたい。ところが、ビデオ記録によるフォームについては大きな変化がみられ、それらは特に動きのなめらかさ、力強さに見ることができた。そうした特徴的な動きの変化は以下の通りである。

- ①投球前の視線の方向が実践後はより前方に向けられている。
- ②投球前、正面に向けられていた身体の向きが、片足を引いて投げる方向に対して半身に構えている。
- ③バックスイングがより後方になり、それに伴い上体がしなっている(反っている)。
- ④投球後、ボールを投げた方向に視線を向けており、さらにフォロースルーの動きが出ている点。
- ⑤前足を軸に上半身を回転させる(捻る)動作が出ている点。
- ⑥投球後、ボールを持っていた手と逆の足が前に出るようになった点(実践前は逆の足が出ていた)。

こうした動きの変化は、2-2. 方法の指導場面の中にもみることができた。方法(2)にある目標物に向かって投げる実践では、的により近づき両足で跳び上がり肩の位置から球を押し上げるようにして投げ入れていた児童が、少しずつ距離を広げた位置から的に狙って投げ入れるようになった。方法(4)のペットボトル・ロケットの遊びでは、児童にロケットをより遠くに飛ばしたいという気持ちが出てきたことにより、助走をつけて投げる、後方に大きく腕を引いて(上げて)投げるという本人な

りの工夫をするようになった。投球後の視線やフォロースルーもこの実践が活かされているようにも思われた。

また捕る動きの変化では、方法(3)で、「パー」と言って捕球前の構えで両手を前に出し、「グー」と言ってボールを体の正面でとらえ、「キュー」でボールを保持するという一連の流れでボールを胸受けするよう指導した。指導開始時は、一つひとつの動きを丁寧に確認しながら覚えていたが、これらの動作がより滑らかになっていった。また、「胸受け」を意識したことにより、膝を曲げて、ボールが転がってくる方法に移動して正面で捕球する動きもでてくるようになってきた。

以上、「投げる・捕る」動作を習得していくための指導例と児童の変化についてみてきたが、今後は小学部高学年段階の「球技」につなげていくために、ボールを使った児童同士のやりとりの場面を授業の中で増やしていきたい。



写真3 ボールを使った準備運動の例



写真4 ボール投げに類似する活動の例

3. 中学部の実践

「身につけた動作を実際の種目の中で習熟」させることをねらいとした授業づくり

3-1. 目的

実際の種目「バドミントン」を通して、「投げる・捕る」動作をさらに高めることや仲間や先生と運動することの楽しさを味わい、ゲームのルールや球技の特性を活かし集団性を高めていくことの2点を指導のねらいにした。

3-2. 方法

週1回行われる「体育」の時間、8名の生徒に対し体育館にて「バドミントン」の指導を行った。「バドミントン」の目標は以下の3点である。(1) 正しいオーバーハンドスローのフォームを作る。(2) 道具の操作性を高める。(3) バドミントンのラリーを楽しむことができる。またこれらの指導目標を達成するために、以下のような教材を作成しそれにあわせた指導計画を設定した。

表1. バドミントンの指導計画

指導内容(教材)と時間数	1	2	3	4	5	6
①シャトル投げ	■					
②新聞棒投げ		■				
③虫取り網キャッチ			■			
④つりシャトル打ち				■		
⑤つりシャトルロープ渡り					■	
⑥タオル打ち						■
⑦しなり棒						■
⑧風船つき						■
⑨トス打ち						■
⑩教員とラリー						■

上記した教材・教具の例とその指導方法についてみていく。

教材例②新聞棒投げ

作成方法：新聞紙を棒状に丸める。太さはラケットのグリップ程度が望ましい。長さは、30cm～60cmくらいでいろいろな長さのものがよい。

使用方法及び指導上の留意点：棒の先を持ち、上手投げで棒が回転するように投げる。前方の的めがけて投げる。



写真5「新聞棒」と活動の例

教材例③「虫取り網キャッチ」作成方法：ラケットと同じ長さに虫取り網を切り、持つ部分をグリップテープなどで持ちやすくする。使用方法及び指導上の留意点：始めのうちは上手く取れないので、シャトルを手で投げて取る練習を行う。慣れてきたら、ノックのようにラケットで遠くに打ち行う。



写真6「虫取り網キャッチ」と活動の例

教材例④「つりシャトル打ち」

作成方法：ギャラリーなどの高い位置にロープを張る。リングにゴムひもを結び回転しやすくし、上部はプラスチックの筒（絡まり防止）などにゴムひもを通す。使用方法及び指導上の留意点：始めのうちは子どもの好きに打たせるが、慣れてきたら打つ方向や足の置き位置などを印などで分かりやすく目当てをつけて行う。



写真7「つりシャトルうち」と活動の例

以上の教材を使いながら、シャトルを投げた際のオーバーハンドスローのフォーム、ラケットの操作性の変化についてのビデオ記録をもとに検討した。

3-3. 結果及び考察

全6回の授業を通し、幾つかの変化や成果が見られた。動きの面に関しては、投げる動作の基本として行ったオーバーハンドスロー（オーバーヘッドストローク）においては、フォームに変化が見られた。当初投げる動作に置いて、手投げや上半身と下半身の使い方にアンバランスが見られたが、数人の生徒において、腕の振り方や腰の回転など身体のしなやかさが出てきた。また様々な道具を用いた活動を行うことで、ラケット感覚やボール感覚など道具を扱う操作性の向上が感じられた。特に今回はオーバーハンドスローのフォーム、ラケットの操作性を高めるためにオリジナルの教材を作成しそれを活用しながら指導をすすめた。こうした教材は生徒の興味

関心を高めるのに非常に効果的であったといえる。こうした教材に関わるうちに、実際のバドミントンでもシャトルがラケットに当たりだし、生徒の意欲がさらに向上し、少しずつバドミントン自体を楽しめるものになっていった。今回取り扱ったバドミントンという競技は、道具を操作して行うという競技特性からも運動技能は直接身体でボール等を扱う種目よりも難しい。その意味でも今回のような教材の使用は効果的であり、他の種目へも応用できると考えられた。今後、競技として成立させていくにはルールを理解も含め課題が多いが、教材を工夫し練習回数を重ね、学校の休み時間や休日での取り組みも行っていくことで、この種目がより身近なものとして定着していくことが期待できるのではないか。

4. 高等部の実践

「経験した運動を余暇に発展」させることをねらいとした授業づくり

4-1. 目的

高等部では、卒業後や余暇に発展させていくために中学部までに経験してきた運動技能や運動種目の経験をさらに広げることに加え、自分自身がやりたい種目を自ら選ぶ経験を積み重ねることを目的とした。

4-2. 方法

高等部生徒の生活年齢や運動領域のバランス、学部行事、学校の施設設備等を考慮し、第10期に分けた「体育」の年間計画を設定した。(表2)

また、これらの年間計画における「球技」の指導については、生活年齢(高校生という年齢にふさわしい種目)、話題性(メディア等で触れる機会が多く、興味関心が高い種目)、地域で実際に取り組める可能性、授業の実施時期や活動場所、気候等を考慮した。

さらに、種目の特性についてもバランスよく経験できるように、戦術ベースの分類及びオープンスキル・クローズドスキルの分類も行いながら種目選択を行った。種目の例は以下の通りである。

○「キックベースボール」

戦術ベースの分類：フィールディング/走塁型
 オープン/クローズドスキル：オープンスキル

○「レクリエーションスポーツ」

(フライングディスク・グランドゴルフ・ボッチャ)
 戦術ベースの分類：的当て型
 オープン/クローズドスキル：クローズドスキル

○「選択球技Ⅰ」(サッカー)

戦術ベースの分類：侵入型
 オープン/クローズドスキル：オープンスキル

○「選択球技Ⅱ」(ティーボール)

戦術ベースの分類：フィールディング/走塁型進入型

オープン/クローズドスキル：オープンスキル

○「選択球技Ⅱ」(バスケットボール)

戦術ベースの分類：侵入型

オープン/クローズドスキル：オープンスキル

○「選択球技Ⅱ」(ポリバットピンポン)

戦術ベースの分類：ネット型/壁型

オープン/クローズドスキル：オープンスキル (クローズドの要素も含む)

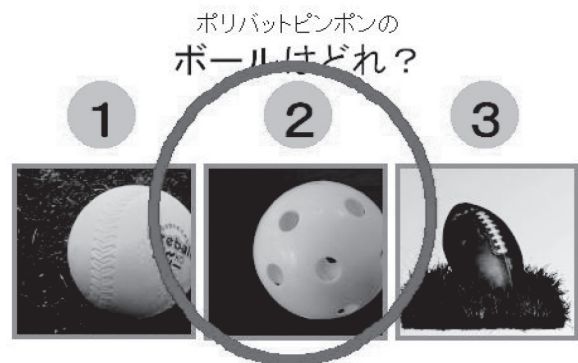
表2. 高等部「体育」の年間計画

	単元名
第1期	体慣らしの運動
第2期	春のレクリエーション大会
第3期	トレイルラン
第4期	マイエクササイズ
第5期	アクアエクササイズ
第6期	キックベースボール
第7期	レクリエーションスポーツ
第8期	選択球技Ⅰ
第9期	選択球技Ⅱ
第10期	コンタクトスポーツ・ダンス

特に「選択球技Ⅰ・Ⅱ」については、自分がやりたい種目を生徒自身が主体的に選べるよう、オリエンテーションを実施した。オリエンテーションの流れは、

- ①事前アンケート(種目についての興味・関心・経験)
- ②説明(パワーポイント、ビデオ、資料等で、種目の特徴、ルール、道具、時事ネタを説明)(※資料1)
- ③体験(教員のデモンストレーション、できるだけゲームに近い形での体験)
- ④選択(アンケート用紙に記入、生徒に応じて具体物を提示)、以上の手順で行った。

さらに評価についても生徒自身が自己評価できるように「体育ノート」(※資料3)を作成し、授業ごとに毎回



資料1 種目説明のスライド



資料2 種目説明のスライド

生徒が記入できるようにした。授業前の体調や気分に加え、授業のねらいについても、簡易に自己評価できるようにした。また、授業場所に練習課題や試合結果の記録表を掲示した。活動場所や廊下に掲示することで、結果や課題を仲間と共有することや、他者からの評価を得たりすることにつながった。単元終了後に種目についての事後アンケートをとり、その種目についての興味・関心やおもな動きについての得意・不得意の自己評価を記載できるようにした。

4-3. 結果及び考察

余暇活動につなげるための体育(球技)を考えてい

くにあたり、選択球技における種目選択の場面やその評価・ふりかえりに焦点をあてて実践をすすめてきた。種目選択をするにあたり、特徴・性格の異なる多様な種目を設定した。その上でオリエンテーションを実施した。その中で、ルールや協議人数、道具を具体的に提示することで、種目の特性を知り、それらの情報に加え、自分の性格や体力等を考慮し、種目を選択しようとする姿がうかがえた。さらに、一流選手の活躍を扱うことで、それらの選手を意識し、目標にしながら取り組む姿がみられた。単元当初から生徒の授業に対する期待感が高まり、意欲的に取り組む姿がみられスキルの向上にもつながった。また、この点についてはメディアで扱われる選手やイベントに触れることで、スポーツを「観る」楽しさにもつながっていくことも期待できるのではないかと。

次に授業の評価・振り返りについては、体育ノートや練習課題記録表を活用したことにより、生徒が自己評価でき自分の課題を明確にとらえることができた。さらに、対戦表や作戦ボードを活用したことにより、チームの課題を仲間同士で共有できるようになった。このことは、集団スポーツに必要な仲間と協力する姿勢、他人を思いやる心、コミュニケーションといった面を育てていくうえで有効であったと思われる。うした評価・振り返りは生徒だけでなく、授業を評価していく側の教師にとっても有効であり、生徒の意識の変化や課題意識、自己評価の方法等を見取りやすくすることで、次回の授業を組み立てる際の判断材料となった。

今後は、余暇につながる体育を目指していくうえでも、今回検討した種目選択の場面や評価・振り返りを活かしながら、ルールやより個に応じた取り組みを行い、自ら考え取り組む体育の授業づくりを目指していきたい。

体育ノート

せんたくきゅうぎ 「選択球技Ⅱ」(バスケットボール)	
へいせい 平成19年 月 日()	なまえ 名前:
きょうのがくしゅう 今日の学習	
きょうのたいちよう 今日の体調	
<input type="checkbox"/> スツクリ <input type="checkbox"/> だるい <input type="checkbox"/> やる気マンマン <input type="checkbox"/> 食欲がない <input type="checkbox"/> ねむい <input type="checkbox"/> モヤモヤ	
きょうのじゅぎょう ①今日の授業は <input type="checkbox"/> たのしかった <input type="checkbox"/> つまらなかった ②練習は <input type="checkbox"/> かんたんだった <input type="checkbox"/> むずかしかった ③ゲーム(試合)は <input type="checkbox"/> たのしかった <input type="checkbox"/> つまらなかった	
たのしかった理由(りゆう、わけ)は? () ゲームで かったから <input type="checkbox"/> 作戦が成功したから () シュートが きましたから () () パスが うまくいったから <input type="checkbox"/> () たくさん うけたから <input type="checkbox"/> () こえを たくさんだせたから <input type="checkbox"/> () チームのメンバーと なかよくゲームができたから <input type="checkbox"/> () ルールやマナーを まもることができたから <input type="checkbox"/>	
しあひけっか 試合結果	
チーム	てんたい 対
チーム	てんたい 対
じゅぎょう 授業のあとの気分は? <input type="checkbox"/> きもちいい <input type="checkbox"/> すこしつかれた <input type="checkbox"/> とてもつかれた <input type="checkbox"/> ものたりない	
かんそう 感想 (がんばったこと、気持ちよかったこと、気づいたこと、次回の課題など)	

資料3 体育ノート

VI. 総合考察

これまで、特別支援学校における球技実践を通して指導内容、方法について検討してきた。球技の特性は集団性や競技性にあるとされるが、こうした球技(集団的スポーツ)を通して仲間と運動することは、仲間づくりや生きがいづくりを通して余暇を充実させ、そして卒業後の生活を豊かなものにしていくという点で重要な意義があるといえる。その意味では学齢期の体育において球技の特性に十分親しみ、楽しめるようにすることが重要である。

ところが、中川(1990)⁴⁾は知的障害養護学校の体育の内容として「集団的スポーツ」が最も重要とされながらも、実際の授業は長距離走、体操といった個人的スポーツが多いという現状を指摘している。また、球技は

個人的技能を基本とし、集団的技能を用いてその特性を味わうことをねらいとする運動種目でありながら、知的障害養護学校の体育教員が体育指導場面における最も困難な点について、「技術指導が難しい」ことをあげている。また本研究の問題提起でも、日頃体育の授業で球技に取り組む際、「投げる・捕る」という基本的な運動技能が十分でない子どもが多く見受けられることを述べた。学習指導要領では体育の目標として、「明るく豊かな生活を営む態度を育む」を掲げ、生涯にわたって運動を豊かに実践するための力を育てることを目指しているが、実際には球技の特性を味わい楽しむまでには至っておらず、その指導については運動技能の習得ははじめ課題が多いことがうかがえる。

これまで特別支援学校における体育の実践の中で球技（ボール遊びを含む）の実践紹介や報告がいくつか見られるが、これらは学級での取り組みや学部内の研究にとどまっている。この点については、後藤（2001）⁵⁾も体育の実践において小学部から中学部そして高等部へという連続したカリキュラムの整合性を求めている学校が少なく、同じ学校に9年間あるいは12年間在籍していても、卒業後の子どもの将来像を考えて今の目標を立てることをせずに、その時その時の目標に終わってしまい、同じ学校に継続して在籍している意味が感じられないことを問題点としている。本来一つの運動を身につけるにあたって、より継続的な取り組みが必要とされる養護学校の子どものための体育を考えていくには、小学部（もしくは幼稚部）入学から高等部卒業に至るまでの体育のねらいを整理し、段階的な実践を行い将来へとつなげていくという視点をもって取り組んで行く必要がある。

こうした現状を踏まえ、本研究では球技のねらいや活動内容について学部を越えた話し合いを行い、その上で幼稚部と小学部では「投げる・捕る」といった基本的な運動技能をしっかりと身につけていくこと、さらに中学部と高等部では一人ひとりが持っている運動技能を実際の種目の中で活かし色々な球技種目を体験することを研究の主たるねらいとした。幼稚部では幼児のボールへの関心や、ボールの扱い方の広がりについて、小学部では事前・事後テスト（ソフトボール投げ）の結果や、ボールを投げる・捕るフォームについて、観察記録やビデオ記録をもとに考察を行った。今後は、それぞれの実践の内容や方法をより広げていくと同時に、その評価方法についても検討していく必要があるだろう。中学部では、バドミントンの教材づくりを通して「目標となる運動に似通った動き」を経験させ、それをどう配列させて必要な運動技能を獲得していくかを検討してきた。金子（2004）⁶⁾、三木（2005）⁷⁾は、動きを覚えようとする場合、

身体の動いていく様子を実感的に思い浮かべるときの素材、つまり類似の運動例をより多く経験しておくことが重要としている。こうした活動を通して運動技能を身につけていながら、教員や友だちとのやりとりの中で、相手にボールを上手く投げる（打つ）ことや、相手から受け取ることができたという成功体験を積み重ねていく必要があるのではないか。高等部では、中学部までの経験をより「広げる」（多様な運動種目を体験する）という側面はもちろん、より「深める」という側面にも目を向けていく必要があるであろう。そのためには単に教員から生徒に活動を与えるだけでなく、今回の実践にもあるように生徒一人ひとりが「自分はどんな種目を、どのように楽しみたいか」を明確にする機会を学習の中に位置づけていきたい。

文献

- 1) 中央教育審議会（2005）：特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）. P24.
- 2) 日本知的障害福祉連盟編（2005）：発達障害白書. 日本文化科学社, 166-168
- 3) 渡邊貴裕, 他（2007）：知的障害養護学校におけるボール運動の授業実践, 東京学芸大学紀要, 第58集, 226
- 4) 中川一彦（1990）特殊教育諸学校の体育教員の現状に関する一考察. スポーツ教育学研究, 第10巻第1号, 60
- 5) 後藤邦夫, 他（2001）：障害者教育の人間学. 中央法規, 124-132
- 6) 金子明友（2004）：教師のための運動学. 大修館書店, 45-46
- 7) 三木四郎（2005）：新しい体育授業の運動学. 明和出版, 132-137

特別支援学校における教科教育学的研究

— 学部間の連携による教育課程づくり —

A study of curriculum of a school for students with special needs

渡邊 貴裕*・丸井 曜子*・原田 純二*・小島 啓治*
尾高 邦夫*・國分 充**

Takahiro WATANABE *, Yoko MARUI *, Junji HARADA *, Keiji OJIMA *
Kunio ODAKA * and Mitsuru KOKUBUN **

東京学芸大学附属特別支援学校

要 旨

生涯スポーツを意識した体育の教育課程をつくるための資料を得ることを目的として、球技に関して、学部間の連携・協同を図りながら実践研究を行った。対象は、東京学芸大学附属特別支援学校、幼稚部から高等部までの幼児・児童・生徒である。幼稚部と小学部では「投げる・捕る」といった基本的な運動技能をしっかりと身につけていくこと、さらに中学部と高等部では一人ひとりが持っている運動技能を実際の種目の中で活かし色々な球技種目を経験することを研究の主たるねらいとした。幼稚部では幼児のボールへの関心や、ボールの扱い方の広がりについて、小学部では事前・事後テスト（ソフトボール投げ）の結果や、ボールを投げる・捕るフォームについて、観察記録やビデオ記録をもとに考察を行った。今後の課題として、それぞれの実践の内容や方法をより広げていくと同時に、その評価方法についても検討していく必要性が指摘された。中学部では、バドミントンの教材づくりを通して「目標となる運動に似通った動き」を経験させ、それをどう配列させて必要な運動技能を獲得していくかを検討した。その結果、こうした活動を通して運動技能を身につけていきながら、教員や友だちとのやりとりの中で、相手にボールを上手く投げる（打つ）ことや、相手から受け取ることができたという成功体験を積み重ねていくことが重要であることが示唆された。高等部では、中学部までの経験をより「広げる」（多様な運動種目を経験する）という側面はもちろん、より「深める」という側面にも目を向けていく必要性が考えられ、そのためには単に教員から生徒に活動を与えるだけでなく、今回の実践にもあるように生徒一人ひとりが「自分はどんな種目を、どのように楽しみたいか」を明確にする機会を学習の中に位置づけていく必要性が示された。

キーワード：特別支援学校・教育課程・体育

* School for children with Disabilities attached to Tokyo Gakugei University
** Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)